

実習指導者と養成校教員との連携方法の試み －実習指導者に対して授業参観を実施した結果からの報告－

Trial of Cooperation Method between Training Instructors and Training School Teachers －Report on Results of Instructors Visits to Classes－

森永 夕美
MORINAGA Yumi

キーワード：実習施設懇談会，実習指導者，連携，授業参観

Key Words：Practical Facility, Round-table Conference, Instructor, Cooperation,
Classroom Visitation

1. はじめに

連携とは、連絡を密に取り合うことであるが、何のために連絡を取り合うのであろうか。それは互いに同じ目的を達成するためである。介護福祉士養成教育の場合でいう実習先との連携は、介護福祉士を養成するという一つの目的に向かって、養成校教員と実習指導者が協働で教育活動に臨むために必要不可欠な要素である。生活福祉コースでも連携方法として実習前の打ち合わせや実習中の巡回指導、実習後の実習評価のやりとりや事例研究発表会への招待などを今まで行ってきた。それに加え 2017 年度からは実習施設懇談会（以下、懇談会とする）を開催して実習指導者を本学に招くこととした。なぜなら、懇談会の開催目的は実習施設との連携強化を図るだけでなく、介護福祉士養成教育の質の向上のために、本学の介護福祉士養成カリキュラムを理解していただき、また、現場からの意見も吸い上げて実習指導の内容を共有していきたいと考えたからである。

介護福祉士養成カリキュラムにおいて介護実習は、学内で学んだ知識と技術を実際の現場の利用者との関わりにおいて統合化させ、いかに個別ケアを実践できるかという重要な科目となっている。しかし時として学生からは、学校での学んだ内容との違いに戸惑い、指導内容に不信感を抱く者もいる。それらは特に実習指導者と養成校教員間の連携・相互理解の不足が原因の一つとして考えられる。

今回は 2017 年度に本学の養成カリキュラムについて説明を行い、2018 年度に「生活支援技術」の授業参観を試みた。それら懇談会で得られた実習指導者からの意見について検討し、今後の実習施設との連携の在り方について考える。

2. 介護福祉士養成カリキュラムにおける実習と実習指導者

介護福祉士養成カリキュラムでは、450 時間の現場実習を設定している。また、実習を実習施設・事業等（Ⅰ）（以下、実習Ⅰと呼ぶ）と実習施設・事業等（Ⅱ）（以下、実習Ⅱと呼ぶ）に分け、それぞれの目的が設定されている。実習Ⅰでは、訪問介護や通所介護、最近では小規模多機能事業所など在宅で暮らす高齢者や障がい者支援サービスの事業所、生活保護法や老人福祉法、児童福祉法などの多種多様な現場を実習施設と位置付けている。これにより、各種サービスの利用者や家族とのコミュニケーションを図り、その現場で働く他多くの専門職との連携について理解し、また、生活支援技術等を学ぶことを目的としている。一方実習Ⅱでは、実習Ⅰでのコミュニケーション技術、生活支援技術、多職種連携に加え、介護過程の展開を主とし、それにより個別ケアを理解し学内で学んだ知識・技術を統合化させることを目的としている。実習Ⅰ・Ⅱとも実習指導者は学生に対し、利用者への生活支援技術やコミュニケーション技術の指導にあたるが、実習Ⅱではさらに介護過程の展開を指導できなければならない。

実習Ⅰでの実習指導者の要件は「介護福祉士の資格を有する者」または「3年以上の介護業務に従事した経験のある者」である。実習Ⅱでの実習指導者の要件は「介護福祉士として3年以上実務に従事した経験があり、かつ、実習指導者を養成する講習会として厚生労働大臣に届けられた実習指導者講習会を修了した者」とある。実習Ⅱのほうがより要件が厳しくなっている。また、実習指導者講習会は1994年（平成6）から導入され、2004年（平成16）から実習指導者の要件の一つとなっている。これが2007年（平成19）の教育内容の見直しから実習Ⅱの指導者には義務化されている。これにより、介護福祉士による介護福祉士の養成という形ができたともいえる。

3. 実習施設懇談会の取り組み

3-1 実習施設懇談会開催の趣旨（理由）

実習前の連携方法の一つとして、実習施設と養成校で共通理解を形成するために懇談会や連絡会といった方法が各養成校で取り組まれている。生活福祉コースでは今まで実施していなかったが、養成校を卒業する学生も1月下旬に介護福祉士国家試験を受験が必要となり、今まで設定していた最後の実習時期が11月と遅いことから2年間で行う実習時期を変更し、それに伴い実習要綱や実習に関する記録用紙を見直した。それら実習に関して2017年度から大きく変更することを含め、本学のカリキュラムや最近の学生の傾向等を説明するため「実習施設懇談会」を企画し実習指導者からご意見をいただくこととした。

また、今まで実習指導者が集まっての意見交換の場というものがなく、実習に関して何かあれば巡回担当教員が個別に相談対応しているのみであったため、今後は学生の実習指導に関する意見交換の場にもなることを想定している。

3-2 実習施設懇談会の意義

実習施設懇談会は、生活福祉コースの教育方針の統一を図り、教育内容の質の向上を目指して実施した。

3-3 実習施設懇談会の概要

(1) 第1回実習施設懇談会（図1、2）

日時：2017年4月25日（火）13：30～15：00

場所：3号館会議室

内容：①介護福祉士養成の動向

②本学の介護福祉士養成カリキュラムについて

③平成29年度入学生からの介護実習スケジュール・記録様式の変更について

④質疑応答・意見交換

目的：生活福祉コースの2年間養成カリキュラムを伝え実習の位置づけを確認する。

平成29年度からの変更点を伝え意見を募る。

出席人数：13名



図1 懇談会の様子



図2 スライドでの説明

(2) 第2回実習施設懇談会 (図3, 4)

日時：2018年6月22日(金) ①9:30～11:40 ②13:00～15:10

場所：①611教室(介護実習室), ②621教室, 懇談会：6号館会議室

内容：(午前) 授業参観と懇談会「生活支援技術Ⅰ(着脱の介助)」1回生

(午後) 授業参観と懇談会「生活支援技術Ⅲ(終末期のケア)」2回生

目的：授業を参観していただき日ごろの学生の様子を伝える。また、授業内容に関する意見をいただき今後の学生指導に活かす。

出席人数：①11名, ②8名



図3 午前の参観の様子



図4 午後の参観の様子

3-4 アンケートの実施

第1回, 第2回のアンケートの質問項目は以下の通りである。記述方法については, 自由記述式で行った。

第1回：1. 生活福祉コースの介護福祉士養成カリキュラムについて

(1) 2年間のカリキュラムの流れについて

(2) 「生活支援技術」の科目について

(3) 「医療的ケア」の科目について

2. 介護実習について

(1) 実習記録の変更について

(2) 実習前に, 学生に学んでおいてほしい(準備しておいてほしい)ことについて

第2回：授業内容, 養成校での教育に対して等の意見や感想

3-5 倫理的配慮

アンケートに関しては懇談会当日に今後の実習運営並びに学生指導の参考とすることを口頭にて説明を行い, 了解を得て各回とも記名式で行った。

今回の結果報告に関しては, いただいた意見に関して個人が特定されないように配慮し, 記述者や所属施設に関する情報が特定されないように文脈に影響がない程度に改変を行っている。

4. 実習指導者からの意見

4-1 第1回実習施設懇談会

懇談会終了後に出席者にアンケートを実施した。初回ということもあり, 懇談会で説明した内容について予め質問項目を設定し行った。以下はそれらをまとめたものである。

口頭と資料を用いての説明であったが, アンケート結果(表1)からは本学の介護福祉士養成カリキュラムについて概ね理解していただいたようである。新しい科目「医療的ケア」については利用者の重度化により必要という意見が2015年に行った医療的ケアの調査¹⁾でもあったが, まだまだ現場での指導までは整わないとの意見がみられた。「生活支援技術」に関しては, 自立支援や個別ケアに対応した技術の習得を期待されていた。

また、実習に関しては特に介護過程が学生にとって一番難しい課題となる。受け持ち利用者の情報を収集しその利用者のニーズを導き出すのだが、利用者の「その人らしい生活」を考えるには相手の立場に立ちながら的確に情報を得る必要がある。今回の改正では、介護過程の情報収集用紙とアセスメント用紙を「これが私」をキーワードに利用者主体で展開する方式^{注1)}を採用した。施設で使用のものと似ているとの意見もあり、概ね好評であった。実習準備について学生への要望としては、「礼儀」「積極性」「話を聞く姿勢」という実習態度や、「施設の理解」「障害に関する知識」「人間理解」など知識面への準備が必要との意見が得られた。

これらの意見を踏まえ、次の年度には実際に「生活支援技術」の授業を見学していただいて意見を聞き、今後の学生指導に活かしたいと授業参観を企画することとした。

表1 第1回実習施設懇談会のアンケート結果

| | | |
|----------------------|-------------|---|
| 本学の介護福祉士養成カリキュラムについて | 2年間の流れ | <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムを理解して、学校で学んだことと現場のことを結び付けたい ・どれも大切な課程だが、教える側も学ぶ側も楽しく学べたらよい ・時間的余裕があるようなカリキュラムで良い ・介護福祉士の資格取得に向けた内容で適している |
| | 生活支援技術 | <ul style="list-style-type: none"> ・実技もしっかり実施されていて良い ・介助がどの様に利用者の動作や生活行為に繋がり、生活支援へ広がるのかを指導してほしい ・極力カリキュラムに沿ったスケジュールを組み、実践してもらいたい ・介護の技術はもちろん生活面につながる家事的なところも勉強してほしい ・他者の援助を受ける状況を、利用者がどう感じているかを体験から想像して学んでほしい ・利用者の自立へつなげることも含め学んでほしい ・実技をしっかりと身に付けてほしい ・基本的な知識を踏まえて、一人ひとりに応じた技術の習得を期待 |
| | 医療的ケア | <ul style="list-style-type: none"> ・今後、医療との連携は大きな課題であり実技も含めとても良い内容 ・医療的ケアの概要が理解できた ・医療の面の知識も介護福祉士には必要 ・利用者が重度化しているため必要で心強い ・少しずつ介護福祉士として専門性が確立されてきている ・今後、学生ができることが施設の職員にはできないという時代が来る ・訪問介護の場合に医療面は利用者によるところがあり、人により内容にバラツキがある ・当事業所で喀痰吸引のことを教える職員がいないところもある ・医療の基礎的内容だけでは実際のところ不安を感じるが、実習で実践をすればよい |
| 実習について | 実習記録様式の変更 | <ul style="list-style-type: none"> ・当施設のケース記録と似ているので同じ考え方なのかと思う ・かなりの分量があり、記録を書く時間が多くなっている ・学生は受け持ち利用者を選ぶとき、書きやすい人を選んでいるようだ ・「からだ」「こころ」のアセスメントシートがとても良い ・「こころ」が記録に入ったのはとても歓迎 ・「こころ」、「からだ」、「くらし」に分けられていて書きやすい ・アセスメント用紙の変更はすっきりと分かり易くなってよい |
| | 実習準備として必要な点 | <ul style="list-style-type: none"> ・最低限の礼儀等一般常識 ・積極的に取り組む姿勢 ・素直な気持ちで心の話を聞くという姿勢 ・特別養護老人ホームについての理解 ・障がい者施設では、簡単な障害に関する知識（ダウン症・自閉症等） ・方法論だけでなく、見方・考え方・捉え方の大切さの理解 ・生活者は私たちと同じ一人の人であるということ ・普通に暮らす、普通に死ぬことについてはもう少し理解が必要 ・お年寄りの命、人生と関わる自覚が必要 |

4-2 第2回実習施設懇談会

午前・午後の授業参観参加者に自由記述式でアンケートを行った。その結果多くの意見・感想が得られた。その中から主要な意見を抽出しカテゴリー別に分けると、9つに分けることができた(表2)。

表2 第2回実習施設懇談会のアンケート結果

※ () の中の数字は同じ意見のあった数

| カテゴリー | 主な内容 | |
|---------------|--|--|
| 1 授業の印象 | <ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な指導 (7) ・分かりやすい (4) ・質問参加型 (2) ・興味が持てる ・コミュニケーションがゆるやか ・新鮮 | |
| 2 学生の雰囲気 | <ul style="list-style-type: none"> ・明るい (2) ・楽しく和気あいあい (2) ・雰囲気がよい ・真剣な姿勢 ・積極的な発言 | |
| 3 教材の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> ・映像 (ビデオ) を使用してイメージしやすい (6) ・体験で実感できている (2) ・データを活用し分かりやすい ・教員の経験談でイメージしやすい ・絵での表現しイメージとして捉えられる ・事例を提示しイメージしやすい ・自分だったらという視点での演習 ・資料も分かりやすい ・グループワークにおいて自分達で考える ・実習を思い起こしイメージを膨らませている | |
| 4 授業の感想・意見 | (午前) | <ul style="list-style-type: none"> ・細かな部分まで自立支援の支援で指導していた ・洗濯など普段の生活力の部分が大切とわかった ・「生活」について具体的に教えていくのも大切とわかった ・看護師と「衣服」の認識の違いがあった ・病院では病衣や寝衣のため、個人の好み等は気づきにくい ・自分自身の身支度に対する意識の見直しになった ・自分のことから専門職としての生活支援へつなげていた ・身支度の意義等しっかり理基礎から学んでいる |
| | (午後) | <ul style="list-style-type: none"> ・終末期の支援は伝えるのが難しい (2) ・まずは死について考えることが看取りケアでは必要 ・人それぞれの死生観があり正解がない ・それぞれの死生観を学生と考えていた ・介護職からみた視点と本人からとらえた人生の終期の視点が大切 ・家族は1日でも長くという思いが強い ・本人の体が枯れていくことは自然なこと ・看取りを行う施設として参考になった |
| | (全体) | <ul style="list-style-type: none"> ・講義の流れ、各段階で何を学んでいるかを知れた ・基礎的なこれだけのカリキュラムを学んでいるのに驚いた ・学校でしっかり基本を教えているのを再認識 ・どのような感じで学んでいるか分かった ・つめこみ、一方的な短期研修と違う |
| 5 改善意見 | (午前) | <ul style="list-style-type: none"> ・ユマニチュードを取り入れてはどうか ・利用者への声かけを大切に進行するとよい ・認知症や拒否への対応方法を取り入れる ・利用者役の学生のリアルさに工夫が必要 |
| | (午後) | <ul style="list-style-type: none"> ・キューブラロスにスポットを当てるとよい ・まずは死ぬとき自分がどうしたいか考えさせるとよい ・専門職として見失ってはいけないことなど実践例を用いては ・絵の出来栄えの方で盛り上がり時間が長い ・教科書と経験する違いを実習で学ぶことも必要 |
| 6 実習へのフィードバック | <ul style="list-style-type: none"> ・今後の実習指導に活かしたい (3) ・職員研修の参考にしたい (3) ・実習指導スキルを上げる必要性を感じた (2) ・現場でもフォローできるように取り組みたい ・知識を広げ職員へのフィードバックをしたい ・実習でそのような経験を持ち帰るか見直す | |

| | | |
|---|-------------|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・時代のニーズに合わせて指導したい ・授業と繋がるように指導したい ・ケアに参加し共に成長できるよう工夫したい ・リラックスした雰囲気をつくりたい ・実習と授業との互いの振り返りが大切 |
| 7 | 学生に不足している点 | <ul style="list-style-type: none"> ・文章を書く力 ・カンファレンスなどでの自分の考えを発言する力 ・人前でうまく話せない ・声掛けが適当になりやすい ・生活体験の少ない学生が多くなっている ・自分自身のことを考えたことがない人に他人のことを考えさせるのは不可能 |
| 8 | 学生に伝えてほしいこと | <ul style="list-style-type: none"> ・「看取り」はこれまでの関わりや介助の延長線上にある ・「死」は誰もが経験する。人生1回しかない普通の暮らしに携わる仕事 ・人の人生に寄り添う重要な役目を担う仕事 ・介護福祉士の仕事の魅力 ・看護と介護の違い |
| 9 | 今後の懇談会への希望 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習指導者の集まりがあればよい (2) ・実習指導者のスキルアップ研修 (2) ・授業参観 |

授業参観の結果、授業の第一印象としては「丁寧な指導」「分かりやすい」との好評価が得られた。学生の印象としては「明るい」「楽しく和気あいあい」などよい印象を与えたことがわかった。授業方略としては、学生に利用者の状況をイメージするためのビデオなど教材の工夫に評価が集まった。その他授業の感想としては、施設と病院での衣服に関する認識の違いや「洗濯などの生活力が必要」、また、「終末期の支援は伝えるのが難しい」、「死生観に正解はない」など現場ならではの意見があった。さらに改善した方がよい点のアドバイスとしては、学生同士の技術練習にリアルさが足りない点の指摘があった。また、終末期に自分がどうしたいか考えるとよいや、専門職として見失ってはいけないことがあるとの意見が得られた。そして、こうした授業を実際に観たうえで、今後の実習指導や施設内研修に活かしたいとの意見も得られた。

5. 考察

養成校教員と実習指導者との連携が図られているかどうかの認識についてはズレが生じていると指摘する研究がある。伊藤優子は、『何か問題があれば連絡をする』ということ、実習指導者は連携が図れているとしている²⁾ 一方、「教員が、連携が図れていると考える要素として、教育方針への理解や実習における学生の課題の理解、学生の目標や能力に応じた指導など²⁾ と実習指導者と養成校教員の連携に対する認識の違いを述べている。川村真弓も「双方の連携に関する認識の差は、『相互の状況理解の不足』と『実習目標の捉え方のずれ』の2点から生じているのではないかと³⁾ と指摘している。養成校教員は学生と入学時から向き合っており、実習期間限定で関わる実習指導者とは学生の状況についての情報量に違いがある。そのため学生の状況について実習前から互いの情報共有が重要になってくる。しかし、実習に至るまでに学生が何をどこまで学んでいるかどの様に養成校で指導しているかについては、限られた打ち合わせ時間では具体的に説明しにくい部分である。今回、授業参観後のアンケートからは「講義の流れ、各段階で何を学んでいるかを知れた」「どのような感じで学んでいるか分かった」との意見が寄せられた。実習指導者が養成校の卒業生であればある程度見当がつくかもしれないが、そうでない場合は学内での学びの状況までは想像しにくいのではないだろうか。こうした意見が得られたことで、授業参観により本学の学生指導の様子をより理解していただくという目的は達成できたと考える。

丸山順子らの調査⁴⁾ では、学生が実習しにくい要因として「職員によって指導内容が違う」「職員が実習課題を理解していない」などをあげている。そのため、実習指導者のみならず受け入れ先の実習施設職員に対しても指導体制の統一化が望まれている。今回、実習指導者の意見からは「職員研修の参考にしたい」との意見があった。荏原順子は養成教育と現

場教育の融合に向けての試みのなかで「介護現場でのスタッフの養成システムは多様であり、その資質はレベル差があり、一つの問題となっている」⁵⁾と指摘している。介護職員には介護福祉士もいればその他の資格や無資格の者もあり、年齢も経歴も様々である。そのため施設内で各種研修が行われているが、忙しい日々の業務の合間では実践に即役立つ知識が優先されている傾向がある。また、荏原は「介護のための基礎教育自体が不均一では、職場全体の質の向上には繋がらない」⁶⁾と述べ、現場の経験知だけでなくエビデンスに裏付けされた理論の研修の必要性を指摘している。こうしたことから、養成教育と現場研修との連携といったことも今後検討していく必要があるのではないだろうか。学生も現場の職員から学校と同じ理論に裏付けされた知識と技術とで説明されれば「学校と違う」といった混乱も解消されると考える。

また、授業参観は実習指導者に学生や養成校の様子を伝え、養成カリキュラムを理解しやすくする効果だけでなく、養成校教員の授業内容の質の向上にも役立つと考える。養成校教員は実務経験があるため現場のことをある程度は理解しているが、教員としての年数が経つうちに現場情報は過去の知識と化している。今回の授業参観からも授業方法に対する多数の意見が寄せられた。最新の現場情報を知っているのは実習指導者であり、実習指導者から意見を求めることで授業内容も最新の現場ニーズに即したものになり教育の質の向上にも繋がると考える。

6. 今後の課題

実習施設懇談会で授業参観を企画したのは、以前、実習巡回指導等で実習指導者より「自分は学校を出て資格を取ったのではないので、学校で何を学んでいるのかよく知らない」との話を聞いたことがあり、気になっていたからである。確かに介護福祉士の資格取得には多くのルートがあり、養成校ルートでの介護福祉士の資格取得者は2割程度にしか過ぎない。また、実習指導者の基礎資格も実習Ⅰにおいては介護福祉士が絶対条件ではないため、社会福祉士や看護師などの場合もありうる。そういった中で、学生が学校で何をどのように学んでいるのかを理解していただくには、実際に観てもらうのが一番だと考えた。実際に授業の様子から実習の時とは違う学生の「明るく」「楽しく和気あいあい」とした普段の様子が伝わり、丁寧な授業内容からは「実習指導に活かしたい」との意見に繋がった。しかし、残念なことに実習指導者全員に参加いただいたわけではない。そのため、今後も現場業務で多忙な実習指導者に参加したいと思わせる内容を企画して参加を勧めていきたいと考える。

また、これから介護福祉士を目指す学生には高校を卒業した者、社会人、そして日本人だけでなく海外からの留学生も増えていき、学ぶ学生の多様化から個人差が激しくなることが予想される。そうしたときに養成校教員と実習指導者の互いの共通認識・共通理解がなければ、実習指導がますます困難になり、学生にとって有意義に実習を行うのが難しくなる。今回の実習指導者の授業参観という試みにおいて、実習のための連絡・情報共有のみならず、介護福祉士養成という一つの目的にむけて、教育方法や指導体制づくりにも養成校と実習施設が連携をしていく可能性が示唆された。今後はさらにこれらの課題について検討し、実習施設懇談会の中身を意義あるものにしていきたい。

謝辞：お忙しい中、多くの実習指導者に授業参観にお越しいただき感謝いたします。また、貴重なご意見をいただき心より感謝申し上げます。

注釈

注 1) 介護過程のシートについては様々な団体が発行しており、それぞれ一長一短がある。今回は介護福祉教育研究会により、学生に分かりやすく介護過程を学んでもらおうと考案された、『楽しく学ぶ介護過程』⁷⁾から、情報収集シート「これが私：くらし」「これが私：からだ」「これが私：こころ」とアセスメントシートを採用した。このシートの特徴

として、「私（利用者）の願い・要望」の記入が随所に盛り込まれており、「利用者の願いや思いに気づく」ことが求められていることである。

引用文献

- 1) 森永夕美：「奈良県内の高齢者介護施設における『医療的ケア』の現状と課題」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 24, p.84 (2016)
- 2) 伊藤優子：「介護福祉実習における実習指導者と養成校教員の連携のとらえ方：インタビューの語りの分析」、『龍谷紀要』, 32 (1), p.91 (2010)
- 3) 川村真弓：「特集 実習指導者は介護人材の定着・確保のキーパーソン 提言1 介護福祉士を育てる実習指導者・教員の連携に関する試案について」、『介護のプロへの応援誌 ふれあいケア』, 20 (8), p.18 (2014)
- 4) 丸山順子, 尾台安子, 合津千香, 小坂みづほ：「介護基礎実習における学生の実習姿勢と実習指導体制との関連性」、『松本短期大学研究紀要』, 21, pp.83-93 (2012)
- 5) 荏原順子：「介護福祉士養成教育と現場教育の融合に向けて：教員と施設の連携で行う職員研修の試み」、『介護福祉教育』, 16 (1), p.87 (2010)
- 6) 5) と同稿, p.92
- 7) 介護福祉教育研究会編：『楽しく学ぶ介護過程 改訂第3版』, 久美, p.103-106 (2016)

参考文献

- 1) 荒木隆俊, 伊藤和雄, 松田水月, 宮地康子：「介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携(2)：介護実習指導者に視点を置いて」、『羽陽学園短期大学紀要』, 10 (1), pp.89-95 (2015)
- 2) 伊藤優子：「介護福祉実習における実習指導者と養成校教員の連携のとらえ方：インタビューの語りの分析」、『龍谷紀要』, 32 (1), pp.77-93 (2010)
- 3) 荏原順子：「介護福祉士養成教育と現場教育の融合に向けて：教員と施設の連携で行う職員研修の試み」、『介護福祉教育』, 16 (1), pp.87-94 (2010)
- 4) 川崎昭博：「介護福祉教育における施設の実習指導について2：養成校から見て積極的に連携が取れているという介護施設の事例から」、『龍谷大学論集』, 477, pp.64-82 (2011)
- 5) 川村真弓：「特集 実習指導者は介護人材の定着・確保のキーパーソン 提言1 介護福祉士を育てる実習指導者・教員の連携に関する試案について」、『介護のプロへの応援誌 ふれあいケア』, 20 (8), pp.18-19 (2014)
- 6) 日本介護福祉士会編：『介護実習指導者テキスト』, 全国社会福祉協議会 (2013)
- 7) 日本介護福祉士会編：『現場に役立つ 介護福祉士実習の手引き：指導者・教員共通』, 環境新聞社 (2004)
- 8) 福田明, 栗栖照雄, 渡邊一平, 横山奈緒枝：「介護実習指導者の『自信のなさ』に関する要因と改善に向けた課題の研究：面接調査の結果のテキストマイニングによる分析を通して」、『最新社会福祉学研究』, 13, pp.1-13 (2018)
- 9) 峯尾武巳：「特集 実習指導者は介護人材の定着・確保のキーパーソン 総論 介護人材の定着・確保に向けて：実習指導者を中心とした組織風土づくり」、『介護のプロへの応援誌 ふれあいケア』, 20 (8), pp.12-16 (2014)